

タイトル

『名もなき疾走』

”Run Without a Name”

著者名

神薙 悠（かんなぎ ゆう）

あらすじ

嵐の日、少女の叫びが過去の記憶を呼び戻す。幼い命を救うため、激しい濁流へ立ち向かう孤独の疾走劇が始まる。

特記事項（概要、アピールポイント等）

過去に大切な存在を救えなかった“名もなき存在”が、再び誰かのために走り出す物語です。視点が反転する終盤、そして勇気と再生を通じて「命の尊さ」と「居場所の意味」を問いかけます。映像化を通じて、誰かの心に愛の灯をともしすことを願っています。

本編文字数 1,403 文字

【本編】

空が泣き叫んでいた。

重く、激しく、怒りをあらわにして。

季節外れのゲリラ豪雨が降り注ぎ、小さな町の川は静かな顔を失い、濁流となって暴れ狂っていた。

川沿いの岸のはずれ。彼は孤独に、ずぶ濡れの身体を震わせ、ただ濁った水面を見つめていた。

この町では知られた存在だった。

彼に近づく者はいなかった。薄汚れた髪、痩せ細った体。

いつも同じ場所にうずくまり、誰も目を合わせようとしなかった。

人々は彼の存在を、怖がっているわけではなかった。

ただ、薄汚れた何かを見るような冷たい視線を向けていた。

その彼の耳に、雷鳴の轟く中、突然何かが飛び込んできた。

「みっちゃんが！ みっちゃんが流されちゃった！！」

叫び声だった。

世界が一瞬、歪んだように感じた。

『みっちゃん』——その名前が彼の胸の奥深くに、鮮烈な記憶を呼び起こす。

決して忘れられない、あの日の出来事。

まだ幼かった彼には、みっちゃんだけが心許せる友達だった。
穏やかで、心安らぐ愛に満ちた日々。

だが津波が、すべてを奪い去った。

波の向こうに消えゆく、みっちゃんの姿。
あの時、彼はただ怖くて動けなかった。助けられなかった。
自分だけが助かったという罪悪感が、心に深く根を張った。
生きる意味も、居場所も、失っていた。

だが、今——

「誰か助けてっ！」

「みっちゃんが！」

その声に、彼は無意識のうちに走り出していた。
濁流が牙を剥く川岸へ、全身を激しい雨に打たれながら。
必死に、全力で、自分だけの孤独な疾走。

——彼の視界に映ったのは、小さな身体が必死にもがき、波打つ水面に揺れる姿だった。

大人の影はどこにもない。

激しくうねる川は、容赦なく少女を飲み込もうとしていた。

(助けなきゃ……今度こそ！)

震える足を踏み出し、彼は濁流へ飛び込んだ。

冷たい水が全身を刺し、激しい流れが彼の体を引き裂こうとした。

だが彼は泳ぎ続けた。もがき、息を乱しながら視界がぐるぐると歪む。

(あと、少し……)

少女の服を掴んだ。

温もりが伝わった。必死に引き上げ、橋桁に引っ掛かった流木に捕まらせた。

その瞬間、彼の身体は激流に巻き込まれた。

無力に流されていく。視界が遠のき、音も光も消えていく。

(みっちゃん……どうか、助かって……)

最後の想いを胸に、彼の意識は闇へと沈んでいった。

深く、深く。

——光。

まぶしい光が差し込む。

目を開けると、そこにいたのはあの少女だった。

みっちゃん？

泥まみれの彼にしがみつき、涙を流しながら抱きしめてくれている。

「よかった……助けてくれて……ありがとう……ありがとう……」

懐かしい温もりが伝わってくる。

こんなふうに誰かに触れられたのは、いつぶりだろう。

心の奥底から、じんわりと温かい感情が広がっていく。

こんな気持ち——誰かに必要とされるって、こんな感じだったっけ。

少女がふと顔を上げ、大きな声で叫んだ。

「ママ！この子が助けてくれたの！このワンちゃん、連れて帰ってもいいでしょ！？」

その言葉に、彼はゆっくり自分の姿を見下ろした。

細く濡れた足、泥にまみれた毛、血のにじむ爪。

みんなに避けられ、嫌われていた自分がいた。

名もない存在として彷徨っていた自分を、今、この少女は必要としてくれている。

少女は優しく微笑み、かつてのあの笑顔と同じように彼を見つめていた。

「ね？一緒に帰ろう。もう、ひとりじゃないよ」

彼はそっと尾を振った。

また、家族になれる。

ぼくの大切な家族。

そう思った瞬間、雨の匂いの中で、
閉ざされていた世界が、優しくほどけていった。

了